

3 小中9年間を見通したキャリア教育

1. キャリア教育でつきたい力

国はキャリア教育で育む力を4つの「基礎的・汎用的能力」と示しています。これをふまえ、大阪府は、5つの「つきたい力」を示しています。

「基礎的・汎用的能力」

人間関係形成・社会形成能力

(例) 他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等

課題対応能力

(例) 情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追求、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等

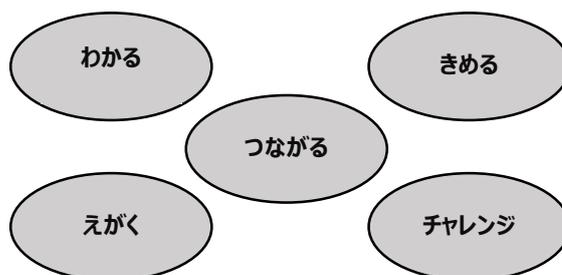
自己理解・自己管理能力

(例) 自己の役割の理解、前向きに考える力、忍耐力、自己の動機付け、ストレスマネジメント、主体的行動等

キャリアプランニング能力

(例) 学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等

大阪府の5つの「つきたい力」



2. キャリア教育として「つきたい力」の系統性

5つの「つきたい力」の系統性の例を、学年ごとに整理しました。あくまでも、ここに示しているものは、例であり、各学校・各中学校区において、日々接している子どもたちの実情に応じて、設定することが大切です。

	小 学 校		中 学 校	
	就学前～低学年	中学年	高学年・中学1年生	中学2～3年生
つながる	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。
	友だちとたくさん話をする。	友だちの話を聞き、自分の気持ちを伝える。	相手の考えや気持ちを理解し、自分のそれを、分かりやすく伝える。	相手の意見を尊重し、自分の考えや気持ちを工夫しながら伝える。
わかる	分からないことは、先生や友だちに質問する。	分からないことや調べたいことがあるとき、先生や友だちに質問したり、自分で調べたりする。	分からないことや知りたいことがあるとき、誰かに質問したり、自分で資料や情報を集めたりして、自分が納得する答えを見つける。	分からないことや知りたいことがあるとき、誰かに質問したり、自分で資料等の情報収集を行ったりして、周りも納得できる答えを見つける。
	自分の気持ちを知る。	自分の考えを持つ。	いくつかの情報を総合的に判断して、自分の考えを持つ。	多様な進路の中から、自分に適した進路を選択する。
えがく	好きなことや、やりたいことを見つける。	やってみたいことや目標を見つける。	目標を立て、実現するための方法を考え、計画する。	自分の将来の夢や目標を立て、実現するための方法を考え、計画する。
	やりたいことに取り組む。	好きでないことにも取り組む。	好きでないことや苦手なことにも、進んで取り組む。	失敗してもあきらめず、困難なことにも挑戦する。

3. カリキュラム・マネジメントとキャリア教育全体指導計画「Plan」

“うちの子たち”に「つきたい力」を明確にする

キャリア教育の全体指導計画を作成するにあたり、前頁に記したつきたい力などを参考に、今在籍している子どもたち、すなわち“うちの子たち”にとっての課題は何かを丁寧に分析し、その解決に向けて必要な資質・能力を明確にすることが不可欠です。取組みを進めていく際にはその取組みによって、どの力をどの程度まで育むのかを教職員が意識することが大切です。例えば、長年続けられている取組みの中で、「イベント化された取組みになっていないか」「今いる子どもの課題に応じた取組みになっているか」ということを確認するとともに、中学校区のめざす子ども像に向けて、つきたい力の系統性が適切に設定されているかを都度確認することも大切です。

キャリア教育全体指導計画の作成

全体指導計画とは、「めざす子ども像」と「つきたい力」の実現に向けて、児童生徒の発達段階ごとに、どのような目標でどのような取組みを行うのかをまとめた計画です。その作成にあたっては、「PDCA サイクル」を機能させることに留意する必要があります。

キャリア教育を効果的に進めるためには、地域（中学校区等）の教職員が連携して、全体指導計画を作ることが大切です。

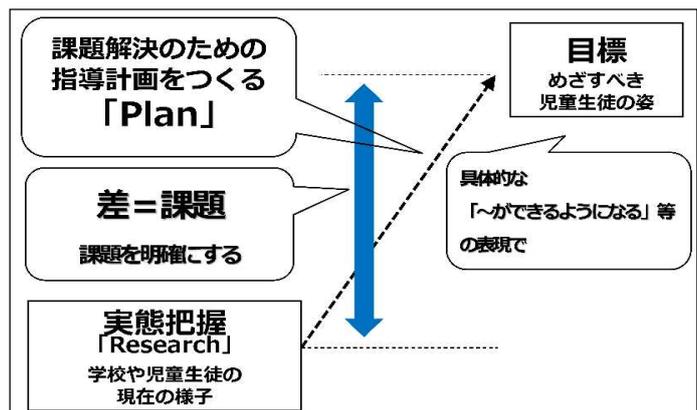
学年ごとの詳細な計画を立てる際には、適切な実施時期の検討や必要に応じて教科の単元配列を組み替えるなど教科横断的な観点を取り入れることも大切です。また、主な活動と関連する各教科等のつながりを矢印で示すことも有効です。

全体指導計画では、学年のつながりやつきたい力の系統性等を意識することや、地域資源等を活用しながら効果的に組み合わせることも必要です。

実態把握「Research」

PDCA サイクルを機能させ、具体的な取組みの計画をするためには、まず実態をつかむ「Research」が大切です。その際、新しくアンケートの実施を検討する前に、これまでに実施しているアンケートを活用できないか確認し、その回答状況から、実情を把握し

ましょう。また、キャリア・パスポートの記述等から把握することも有効です。実態把握による児童生徒の現状をスタートラインとし、卒業時点で、「地域や社会の課題を解決するため、主体的に行動することができる」等、「できるようになってほしい」行動等を目標「めざすべき児童生徒の姿」として設定します。



評価できる形での目標の設定

目標を設定する際には、「生き生きと光り輝く子ども」や「たくましく未来を切り拓く力」という抽象的な表現では、具体的にどのような姿になることが達成と言えるのか、どのようなアンケート項目で達成と判断できるのかが非常にあいまいで、客観的に達成できたことの見取りや評価が難しくなります。評価がはっきりと定まらないということは、子どもの変容を共有できないということにつながります。「目標」は、「～ができるようになる」等、明確に表現することが大切です。

キャリア教育推進組織・体制づくり

キャリア教育を効果的に進めるために、各校でキャリア教育の担当者を決め、体制や役割を明確にすることが重要です。中学校区内の各校のキャリア教育担当者が集まってキャリア教育を推進する体制ができると、地域が一体となってキャリア教育を進めることができます。

4. キャリア教育の実践「Do」

目標と現状の差から「すべきこと」を見出し、取り組みます。中心となる一つの取組みだけでなく、様々な教科や学習活動を関連させて「つけたい力」を育みます。その際、様々な学習活動に優先順位をつけ、指導者が単元を焦点化し、意図的にキャリア教育とつなぐような、体系的、系統的な指導とすることが大切です。

5. キャリア・パスポートの活用「Check」

キャリア・パスポートとは

子どもが、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動を要として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成をふりかえったり、先を見通したりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ的な教材です。

キャリア・パスポートの意義

子どもにとっては、ふりかえりの中で自らの変容に気づき、自己理解を深めるためのものとなり、また、それをふまえて将来の自分の姿をえがき、主体的に学びに向かう力をつけていくものになります。教員にとっては、子どもが小学校から中学校、そして高等学校でどのような学びを積み重ね、成長してきたのか、子どもへの理解を深め、個に応じた系統的な指導に生かすためのものになります。

大阪府版キャリア・パスポート

キャリア・パスポートは各学校や学級において、創意工夫を生かした形での活用が可能ですが、その参考となるよう府教育庁は大阪府版キャリア・パスポートを作成しています。大阪府版キャリア・パスポートのふりかえり項目では、「つけたい力」がついたかどうかを自己評価し、自分の成長を可視化できるようになっています。取組み後の「ふりかえりカード」では、取組みが「つけたい力」につながっているのか、児童生徒にどのような変容が見られたのかを見取り、取組みの評価、見直しにつなげることができます。

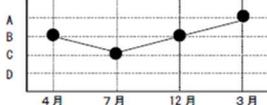
【大阪府版キャリア・パスポート】より

「ふりかえり項目」

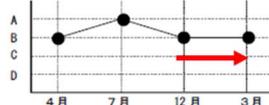
◎ 1年間のわたしのうつりかわりを見てみましょう。

ふりかえり		4月	7月	12月	3月
		あてはまるところに、○をつけましょう。			
①自分のよさを見つけれ ましたか。	そう思う				○
	少しそう思う		○	○	
	あまりそう思わない	○			
②友だちの話を聞き、自分の気持ち をつたえましたか。	そう思う		○		
	少しそう思う	○			○
	あまりそう思わない			○	
				そう思わない	

⑤自分の将来の夢や目標を立て、実現するための方法を
考え、計画しましたか。



⑥失敗してもあきらめず、困難なことにも挑戦
しましたか。



※A「そう思う」 B「少しそう思う」 C「あまりそう思わない」 D「そう思わない」

「ふりかえりカード」

「OOOO」ふりかえりカード（4年生）

うれしかったこと、楽しかったこと、気づいたことなどを
書きましょう。

年 組
名前

記入日 年 月 日

(先生から)

※大阪府版キャリア・パスポートはあくまで一例です。中学校区や学校の現状等に合わせてカスタマイズして活用してください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/jidoseitoshien/kyaria/index.html>



取組みの評価・目標の達成度の見取り「Check」

各学年で実施したキャリア教育の取組みについて、キャリア・パスポートの記載内容等から、子どもの変容を把握し、子どもの発達段階に応じた取組みになっていたかを検証しましょう。また、次の学年への接続を意識した取組みになっていたかなど、学校全体で取組みの評価や目標の達成度を見取った上で、次に予定している取組みの改善を図りましょう。

「目標」を達成できたか、「つきたい力」が身についたかどうかなど、取組みの評価や子どもの変容を見取るためには、「アンケート」等の実施が有効です。

アンケートの実施により、できる評価は、「アウトプット評価」と「アウトカム評価」の2つがあります。

アウトプット評価

「何をどれほどやったか」という評価

→全体指導計画に基づき、「取組み」をやったかどうかを評価するもの。

アウトカム評価

「どのような成果を挙げたか」という評価

→「つきたい力」が身についたかどうかを評価するもの。

「目標」は、取組みの評価や子どもの変容を見取る「アウトカム評価」ができるものとして具体的に設定する必要があります。

取組みのアウトカム評価をするためには、キャリア・パスポートの活用が有効です。

6. キャリア教育全体指導計画の検証と見直し「Action」

中学校区でキャリア教育の共有の場をつくる

キャリア教育全体指導計画を効果的に活用するためには、まず小中学校の教職員が、全体指導計画に基づく各校のキャリア教育の取組みを交流、共有する場が必要です。例えば、定期的なキャリア教育担当者会議、夏休みなどの長期休業中の全教職員によるキャリア教育研修なども有効です。

キャリア教育全体指導計画にある取組みの実践を交流し、子どもの姿を語り合います。その際、アンケート結果等をもとにした子どもの変容を共有することも大切です。

「つきたい力」のうち、どの力がどの程度ついたのか、課題は何かを交流したり、「つきたい力」をつけるためにどのような取組みをするかについて一緒に考えたりすることも有効です。

また、現在行っている教育活動を、キャリア教育の観点で改めて整理し、実施していくものを一緒に考えることも大切です。

取組みの見直し・改善

各学校の検証をもとに、中学校区のキャリア教育全体指導計画で示した「つきたい力」や「ねらい」、年間の取組みについて見直し、改善につなげることが大切です。

「つきたい力」を見直す際には、キャリア教育として「つきたい力」の系統性（P6を参考）などを活用して、中学校区の実情や発達段階に応じて設定しましょう。

見直した全体指導計画は、必ず学校の年間計画に反映し、すべての教職員で共有しましょう。

7. キャリア・パスポートの引継ぎ

キャリア・パスポートの引継ぎについては、「学年間の引き継ぎは、原則、教師間で行う」「校種間の引き継ぎは、原則、児童生徒を通じて行う」こととなっています。

引継ぎにおけるキャリア・パスポートの効果的な活用として、年度末の学年間の引継ぎで記載内容を教職員間で共有し、子ども理解に役立てているという事例や、校種間のキャリア教育担当者間で新中学1年生の引継ぎ会議を実施し、キャリア・パスポートを活用して情報共有しているという事例があります。また、高校等進学先で、中学校時のキャリア・パスポートを見ながら、中学校生活を振り返り、高校のキャリア・パスポートにまとめ直すという事例もあります。児童生徒の学びを深めるため、キャリア・パスポートを有効活用しましょう。

【中学校卒業後の取り扱いについて】

中学校卒業後の活用に向けて、一人ひとりの中学校卒業時までの活動が記録・蓄積されたキャリア・パスポートは、高校等進学先から指示があるまで大切に保管するよう生徒に伝えて返すなど、確実な引継ぎができる工夫をすることが大切です。

※参考資料：国立教育政策研究所「キャリア教育リーフレットシリーズ特別編」【キャリア・パスポート特別編1～10号】

https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html

※参考資料：文部科学省初等中等教育局児童生徒課「キャリア・パスポート」に関するQ&Aについて（令和4年3月改訂）

https://www.mext.go.jp/content/20220314-mxt_jidou01-000007080_1.pdf

